季刊

四季

創刊号

一九八四年一月一日発行

四季社

東洋文庫——中国シリーズ

10 捜神記 干宝／竹田晃訳 1,900円

30・23 北京風俗図譜 青木正児編 内田道夫解説 1・2＝各1,500円

24 中国笑話選〈江戸小咄との交わり〉 松枝茂夫・武藤禎夫編訳 1,800円

52 白居易詩鈔〈附・中国古詩鈔〉 森亮訳 900円

83 燕京歳時記〈北京年中行事記〉 敦崇／小野勝年訳 1,500円

92 鹿洲公案〈清朝地方裁判官の記録〉 藍鼎元／宮崎市定訳 1,300円

100 三十三年の夢 宮崎滔天／宮崎龍介・衛藤藩吉校注 1,800円

109 中国古代寓話集 後藤基巳編訳 1,800円

189・128・110 365・298・235 モンゴル帝国史 ドーソン／佐口透訳注 1・2＝各1,900円 4・5＝各1,900円 3・6＝各1,700円

294・209・163 モンゴル秘史〈チンギス・カン物語〉 村上正二訳注 1＝1,800円 2・3＝各1,900円

184 金文の世界〈殷周社会史〉 白川静 1,600円

204 甲骨文の世界〈古代殷王朝の構造〉 白川静 1,500円

217 江南春 青木正児／小川環樹解説 1,600円

267・265・239 唐詩三百首 塘退士編／目加田誠訳注 1＝1,900円 2＝1,700円 3＝1,500円

286・281 漢字の世界〈中国文化の原点〉 白川静 1＝1,600円 2＝1,700円

324 荆楚歳時記 宗懍／守屋美都雄訳注／布目潮渢・中村裕一補訂 1,600円

329 道教 アンリ・マスペロ／川勝義雄訳 1,800円

351・336 419・408 中国民衆叛乱史 谷川道雄・森正夫編 1・2・4＝各1,900円 3＝1,800円

403・362・344 夢溪筆談 沈括／梅原郁訳注 1＝1,500円 2＝1,400円 3＝1,700円

389・382 404・401・397 酉陽雑俎 段成式／今村与志雄訳注 1・2＝1,600円 3・4＝1,700円 5＝1,900円

407・406・405 唐詩選国字解 服部南郭述／日野龍夫校注 1＝1,800円 2＝1,500円 3＝1,700円

〒102 東京都千代田区三番町5 平凡社 電話03－265－0455(代) 振替東京 8－29639

目　次

夏花乙女 …… 植村清二 2
詩の思い出 …… 野田又夫 5
芥川龍之介の死の反響 …… 高田瑞穂 7
東　山（漢詩） …… 松枝茂夫 9
唱歌教育事始のころ …… 山住正己 13
ある夭折詩人のための墓碑銘 …… 小高根太郎 15
無言の夏 …… 浅野　晃 16
書斎漫談 (1) …… 矢野峰人 18
歴史のあかり …… 石山直一 20
花みずき …… たかはし しげおみ 22
仮　面 …… ウイリアム・バトラー・イェイツ 坂口允男 訳 24
招かれる季節 …… 福地邦樹 26
初　冬 …… 江頭彦造 28
山　麓 …… 秦　海人 30
三條界隈 …… 伊達　温 32
雪の歌 …… 岩崎昭彌 34
くちなしの花 …… 保田典子 36
投稿三篇
旅立つ友を送るうた（李白） …… 堀江忠道 38
中流階級 …… 花井タヅ子 39
バンドンの工場 …… 末富栄樹 40
わたしの言葉 …… 田中克己 48
同人規定 …… 49
同人名簿 …… 49

辰雄様追悼

あさぎやまみねの
けぶりのいつまでも
ゆくすえをおも
ひしものを

克己

夏花乙女

植村清二

兄と僕との生れた場所は、少し離れているが、同じ内安堂寺町通二丁目である。この通りの谷町筋の坂を上ったところに浄土真宗の尼寺があって、その八の日の縁日には、一丁目から三丁目までずっと続く夜店が出る。その長さは平野町の夜店に次ぐという。その長い列の両端に、古本屋の露店がある。石油ランプやアセチリン瓦斯の光に照らされて、アンペラの上に、薄汚れた雑本や講義録や雑誌の類が並んでいるのは、何ともはかない感じがしたものである。

二階の兄の部屋には、亡くなった叔父の片身の本箱が二棹あって、その中には雑書が一杯詰っていた。それは殆どすべて兄がこうした夜店で買ったものらしい。全体兄は少し値になる書物は読み了えるとすぐ売り払ってしまう癖があったが、これ

らは値にならないだけに、却つて残ってしまつたのだろう。

その雑書の中に、前田林外の「夏花乙女」があった。林外の第一詩集である。簡単な解説は、日夏耿之介の「明治大正詩史」でも見るがよい。今では稀観本である。和田英作の口絵と挿絵がある。口絵は鼓を抱いた義経を描いた木版刷で、なかなかしゃれている。不思議なことにこの詩集は、何度か居処を転じたのにも拘わらず、いまも僕の手もとにある。

兄は晩年木挽町の文芸春秋社のクラブの三階に起居していた。二階は社員たちが麻雀を囲む場所であった。兄の亡くなる前二年ごろであったと思う。僕は兄とめずらしく棋の対局をした。兄は初段で僕は二級ぐらいであった。棋勢はおもむろに進む。僕は

これ霊郷か、いと柔(やは)き
管弦の楽に妖艶の
弥生の空を夢のごと

魂も漂ふ心地して

と、林外の「翡翠折れ」の一節を、自家製のメロディで低く口誦んだ。すると盤面を見つめていた兄は、すぐ引き取って、似ても似つかぬメロディで

枸杞の姫籬緑なる
とざまに立つや御曹子

と続けた。兄にも三十年前に読んだ林外の詩の記憶が、まだ残っていたのである。

詩の思い出

野田又夫

詩をつくったのは青年の一時期だけであった。高校に籍をおいた時、政治、学問、恋愛のいずれよりも詩を作ることの方が大事であると感じ、深夜五体を畳の上に投げて文字を書いた。あくる日仲間の一賢人に示すと、「ここはくどい」とか「この字は要らぬ」とか言いつつ冗句を削ってくれたが、それでふしぎに詩の体ができるのにわれながら驚きかつ喜んだ。そこで詩の謄写雑誌「璞人」を発行したが、一年下の級に田中克己がおり、われわれの卒業後雑誌を引きついでくれた。

その後大人になってからも詩を書きつづけた友人は、田中ともうひとり伊東静雄とだけであった。かれらは詩集を出すと必ず呉れたが、私はほめことばに窮すること多く、「茫々として美しい」などというだけであった。かれらも私の苦心を見破っていてくれたと思うが。

むかし曹操とその子たちは詩によって名を残したが、孔明の方は故郷の民謡を口ずさみ琴を弾じて楽しむだけであったという。私は幼にして曹操を憎み孔明の高風を慕ったが、ついに歌曲の道を学ぶこともなかった。たゞ時に散文を綴って口に糊しつつ老を迎えた。醜というべきである。　嗚呼。

芥川龍之介の死の反響

高田瑞穂

芥川が自殺して果てたのは、昭和二年七月二四日未明、時に芥川は数え年三六歳。芥川の死の反響は異常に大きかったが、今は文壇的に限って言うと、大正文学から昭和文学への転機であった。昭和文学の新風は、新感覚派とプロレタリア派とのもの、この両者はやがて激しい対立を生じたが、その出発点において両者に共存したものの一つ、それが芥川の死から受けた感銘であった。それぞれの感銘を、両派の代表者たちのことばで暗示す

る。

「我々はいかなる時も、芥川氏の文学を批判し切る情熱を持たねばならない。」これはプロレタリア派の宮本顕治の主張である。

「芥川龍之介氏は人間が達し得る最高の静けさをこの世で知り得た作家であった。」これは新感覚派の片岡良一のことばである。短い引用であるが芥川の死の反響は明らかである。

東山（漢詩）

三年ぶりに帰還する兵士の喜びをうたう。

松枝茂夫

一

我徂東山　我れ東山に徂きて、
慆慆不歸　慆慆として歸らず。
我来自東　我れ東より来たれば、
零雨其濛　零つる雨　其れ濛たり
我東曰歸　我れ東にて帰らんと曰い、
我心西悲　我が心　西に悲しむ。

制彼裳衣　彼の裳衣を制り、
勿士行枚　行枚を士とする勿からん。
蜎蜎者蠋　蜎蜎たる蠋
烝在桑野　烝れ桑野に在り。
敦彼獨宿　敦たる彼の独宿
亦在車下　亦た車の下に在りき。

東の国を征伐に出て行って、長い年月帰れなかった。やつとの思いで帰ってくるわたしを、雨はもうもうと降りこめる。

東にいるときは帰りたい一心で、西の空を望んでは悲しんだものだ。家に帰ったらさつそく服を新調しよう。もう枚なんかふくんだりすることもいらぬのだ。いままでは桑虫が桑野でうごめいているみたいに、からだを丸くしてごろねした

っけ、なんとそれも兵車の下でだ。

〈行枚〉行軍のとき音を立てぬように、枚といって箸状のものを横にして口にくわえる。馬はもとより兵士も用いた。

親結其紐　親は其の紐を結びて、
九十其儀　其の儀を九にも十にもせりき。
其新孔嘉　其の新しきは孔だ嘉かりき、
其舊如之何　其の旧きは之れを如何。

東の国を征伐に出て行って、長い年月帰れなかった。やっとの思いで帰ってくるわたしを、雨はもうもうと降りこめる。

あれはウグイスがその羽根をかがやしつつ飛びかっていた頃だったね、おまえがわたしのところへ嫁いできたのは。黄色い馬やまだら馬に車をひかせてさ。お

まえの腰ひもを結んでくれて、とても盛んな婚礼だったね。あのときのおまえの花嫁すがたの立派だったこと。ところで久しぶりに見るおまえは、さてどんなだろうかな。

唱歌教育事始のころ

山住正己

最近、岩波文庫に収められた長谷川時雨（一九七九～一九四一）の『旧聞日本橋』には、著者の子ども時代の遊びが書かれている。屋外では、子を奪ろ子奪ろ、ここはどこの細道じゃ、かごめかごめ等々をして遊んだという。この遊びでは、無言であったり、わいわいさわぎたてるだけではなく、必ずわらべ唄がうたわれていた。この唄は、日本の子どもたちにとって大事な文化であった。

ところが、時雨の生れた年に設立された音楽取調掛（東京芸術大学音楽部の前身）では、唱歌教育開始にあたり、こんな唄は卑俗だとして斥けた。西洋に向かって門を開いたのはよい。しかし大事な子ども文化を学校から排除してしまったのである。この方針がその後の音楽にどんな影響をあたえたか、きめ細かな検討が必要であると思う。

ある夭折詩人のための墓碑銘

小高根　太郎

肺を病んだ透明な毒蜘蛛が、ほっそりした脚で忍びよって来て、虹色の絲を幾節も吐きかけて、私の魂をがんじがらめに締めあげると、生血をすっかり吸いつくして、ふいに虚空へ消え失せた。頭を斬り落された神々の白い胴体、そのバックにある海と空の紺青、永遠のしじまにまぶしい古代の廃墟、そんな虚妄な風景を愛したのに、そんなお前の脆弱な骸骨は、いまこの墓の下で霜にくだける。

無言の夏

浅野　晃

無言の夏の炎熱が語るのにしばし耳をかたむけよう
これこそ地上での至福の時だ
われらの長からぬ旅の途上
すでに何十遍とめぐりあったこの季節
夏――
汝の炎熱のなんと身にしみて語ることか
無言の夏はわたくしに語る

汝よくこの日まで生きたと
汝よくこの処まで歩みつづけたと
汝なほ生くる日のかぎり勇気と信を失なうなと
わたくしの影を濃く地に歩ませて
わが夏は語る
無言の炎熱の夏は語る
ああこの地上での至福の時

書斎漫談 (1)

矢野峰人

名家の書斎めぐり？　大変結構な企と思います。どうか、どしどし名流の書斎を御紹介願いたいものです。なに、僕のを先づ拝見だと、いや、それは大変だ。われわれ借家住まいの者に書斎などと名づけられるもののあらう筈が無い。どうか、自分で設計した家を御持ちの方々からお願い致したいもので。いえなに、乞う隗より始めよだと。それは恐れ入った。一つ始球式と出かけようか。それぢゃ遠慮無く撮って呉れたまえ、御覧の通り殺風景なものだ。僕のは全く仕事部屋なのだからね。名流の書斎と言えば、昔は「文章世界」の口絵に、その頃有名な文学者の書斎が毎号掲げられたものだ。和室の人が多かった。洋式に構えた人では、島村抱月氏のものなどが記憶に残って居る。上田萬年博士のは洋式だったが、それは大学研究室に於けるものだった。大町桂月などは寝そべって原稿を書いて居るところを撮ってあ

つたように思うが、如何にも桂月流のものだった。最近では「書物展望」の巻頭に名家の書斎が出て居るようだ。その他の雑誌にもあるいは紹介されているかも知れないが、手にする機会が無いので何とも言えない。とにかく書斎の写真は何時見ても気持の好いものだ。僕も昔から、古今の名家の書斎の写真など集めて見たらさぞ面白いだろうと思った事は度々あるが、手許には一枚の切抜さえ無い有様だ。佐藤春夫氏は京都に於ける上田敏博士の書斎を評して「書物の城」と言つて居たように記憶するが、僕は先生の書斎に通された事が無いので、遂にその「城」の外貌さえみもしないで終つたのは残念だ。一体僕は名家の書斎なるものを全く知らない。僕とほゞ同年輩の文学者や学者仲間には親しい人もあり、書物好きでもあり書斎の設備にも苦労する人が随分あるけれども、何と言っても御同様借家住まいの身の上として、さうぜいたくも言えない。かうした次第で、僕は日本人の書斎でうらましいもの、驚嘆すべきものを、実はまだ拝見した事が無いのである。

歴史のあかり

石山直一

嘗(か)って　そこは憲兵隊で
留置場があり
怒号と罵声がとび
恐怖と苦痛の死の影が漂(ただよ)っていた

いまは　その跡に教会が建ち
日曜日ごとに

いのちの御言が語られ
造り主への讃美の歌がささげられ
私もその中に加えられて
古稀過ぎた身が礼拝を守り続けている。

歴史の大きな流れは
暗くても
このような小さな処に
明りが灯(とも)っているのだ。

花みずき

たかはし　しげおみ

ひらいた　ついにひらいた
これぞ花みずきだ
赤　ピンク　クリイム　白
いったい何色あるのだろう

ひらいたひらいた　いちどきにひらいた
今日から春だ
待っていた　昨日も一昨日も
明日こそひらくと

さぁロシア帽とはさよならだ
雪靴ともお別れだ
だがオーヴァーはまだ脱げないな

とりあえず　ハアイ！
おまえたちにキスだ
花みずきがひらいたのだから

仮面

ウイリアム・バトラー・イェイツ
坂口允男訳

「燃ゆる黄金(くがね)の色なして
エメラルド色の眼(まなこ)持つ
君が仮面を脱ぎ給へ
「いなとよ、御身言ふ勿れ
心はげしく、賢(さか)しくて、冷たからずと
知らんとて、かく責め給ふ君たるや

「われはただ仮面の下に
愛ありや、欺りありやを
見たきのみ」。
「君が心をとらへしは
御身に愛を教へしは
正(まさ)しく仮面にほかならず
仮面の下なる物ならず」。
「われは知りたし
君はわが敵ならざるを」。
「いなとよ、君よ、このままぞよき
君と我、はげしく燃ゆる愛あらば
仮面は何ぞかかはらん」。

招かれる季節

福地邦樹

三月　陽ざしが白くなりはじめる
地表と樹木が安堵を取りもどす
まもなくどぶ川のふちにも花草が咲き
新緑はそのふさわしい大気を持つだろう
それはそうあるべきなのだ
彼等が　この季節をたぐり寄せたのだから

そうしたからくりを
俺達も知らぬわけではなかった
しかも俺達が最初に招いたのは

きびしい不毛の季節
稀薄な空気とひからびた泉
炎暑の真昼と憩いない夜のつらなりと

恐らく俺達は正しかったろう
俺達は知っていたのだから
何よりも先に犠牲と忍耐が必要であることを
知慧とは烈しい獲得の意であることを
陰の季節と光の季節の交替の秘密を
また　投ぜらるべき悲歎の深さを
意志の力や　魂の作用の事などを
そうして　遠い願いに誘われてやがて季節がめぐる
俺達の汚辱の物語は遙かな道を静かにたどりつき
ついにこの沙漠に雨を降らすことだろう
すると忍苦の種子らは　まぶしい無垢の花をひらき
思いのふかい実りを持つだろう
そしてその時にこそ俺達は
季節の一循を了解するだろう

初冬

江頭彦造

一円玉が　じゃまになる　世のなか
じゃら　じゃら
　小箱に　入れる……
……衰える

庭師らに　裸にされた　桐　檜
ひろびろと　空が
透けて

女は　網膜剝離　白内障
薄ぼんやりと
　外界で

さらさらと
潮の音

　男は　湯どので
　くらくらと

いっぽんの　桐の　立木
倒れるな
倒れるな

山麓

秦　海人

ここにいると西と北だけが開けて
そこでのさまざまの営みもよその世界のよう
遠い東京のことはめったに聞えないが
今日　古い友だちが死体になって発見されたと聞いた
せまい用水の梅雨の水かさに
やっととげた思いが哀れでならなかった
自分も生きる楽しみをもたないが

この悲しみはどこから来る？
夕日を見ながら考えあぐみ
爪をきり髭を剃り行水をつかって
おもむろに夜のふけるのを待つ
この一日が自分の一生の象徴か。

三條界隈

伊達　温

たそがれころの
ざんざわめきに
織らるる君は
縦の糸
織らるる我は
横の糸
ざんざわめきに
身をゆだね
布と化身す

手を振り
やわわのてのひら
あたたかてのひら

巷にともるともしびに
うつるはあかき唇の
皓き歯こぼれ
愛の字に
そぞろあるきの
中空(なかぞら)に
赤い林檎をむくときの
匂いのやうな吐息あり

雪の歌

岩崎昭彌

そのかみ　天は真綿のごとく流れ
ときどき花弁となつて　舞い降りた

もの憂い影のしのび寄る　気配
明りを点け硝子を透しみると
さらさら音のするのは　雪だった

風　吹雪　それからの晴れた日々
樹氷を縫い　玉肌を風となつて渉り
高らかに　雪煙の歌を唄いつづけた
あるいは　更ける夜の燃える火へ
冷たく疼く一握として　投げこまれ
かすかに立たてて溶けたのだ

今日　――
冬の宴は　かなしい季節となった

くちなしの花

保田　典子

かりの世のかりのえにしの親と子の
神の子なれば還りゆきけり

わが呼べばかのなつかしき声のして
必ずや来む目には見えずとも

今はしも吾子が柩はわが門をいで
ゆかんとす吾はいかにせむ

くちなしの花咲く庭に語らひし
若きいのちは散りにけるかも

かぐはしく人なつかしきくちなしの
匂へる吾子と思ひしものを

わが悔はいやすすべなし至らざる
母をばゆるせ天かける子よ

山梔院保融直日禅居士
いまは亡き子よ吾子よ直日よ

旅立つ友を送るうた（李白）

堀江　忠道

送友人

青山横北郭　　みどりの山は町の北につらなり
白水遶東城　　すんだ川は町の東を流れる
此地一為別　　ここで君と別れてしまえば
孤蓬萬里征　　旅人は遙かかなたに去ってゆく
浮雲游子意　　空にただよう白雲は旅ゆく君の心
落日故人情　　沈みゆく太陽は見送る私の心そのままだ
揮手自茲去　　君が手をふりこの地を去ろうとすると
蕭蕭班馬鳴　　別れをいとう馬はさびしげにいななく

中流階級

花井タヅ子

書くって何？
紙もあるし鉛筆もあるし
寒さをしのぐこたつもあり
風雨をしのぐ家もあり
籠に盛られたリンゴからはかすかな
いゝ匂いがとどいて来る。
黄色くなった萩の葉は朝十時の陽を受けて
東の窓でゆれている。
リンゴの隣りには、今年かえった金魚が五匹
うすみどりの水の中で動くともなく動いている。
東の窓のすぐ下を自動車のエンジンが
大きな音をたてて通りすぎる。
遠くで土を打つ機械の音がしつゞける。
後は風が葉を鳴らす音と時計の音
人は出かけ、よごれた器や　乱れた夜は、
私の両手がそれを清めるために動き出すのを待っている。
冷えた足をこたつであたためながら
書くって何？　と書いている……。

バンドンのゴム工場

末富栄樹

バンドンゴム工場といっても殆んどいまの人にはピンとこないと思う。

当社が昭和一七年、今日のインドネシヤのジャワ島バンドン市にあったゴム工場（当時の呼名はシンガポールラバーワークスジャワ工場。本社工場はシンガポール市にあって英国資本）を陸軍省から委託経営を受命したので、私どもは終戦まで当工場に勤務していた。

当時、私は姉妹会社の日本ゴムに勤務していたので、当社に転任し技術課長の肩書を頂いて、南十字星輝く常夏の南の島で健闘していた思い出を思い出すままペンを走らせる。そのころ私は長い鼻下に美髭をつけた三一歳の好顔（自称か？）の青年技師、肉体も頑健であったが、気力も強く、負けず嫌いの私の公私の健闘振りを今日フィルムに再現して皆様にお目にかけられないのが誠に残念である。昭和一七年は遠く歴史の彼方に消え去ってしまったが、第二次大戦における緒戦の大戦果により石油、ゴム、錫等の資源地である東南アジア諸島はその頃わが軍の手中に納められていた。

それらの諸島には陸海軍の軍政がしかれ、戦争遂行の大きい心臓部になっていた。資源を開発するため民間の

優秀企業から技術と有能な人材を少数精鋭主義で選出し、占領地に派遣する基本方針が確立していた。当社が南方の島に進出できる機会を得た事は、当時すでにゴム工業用品工場としてAクラスであった証拠だと思う。また現小島社長がかげで非常にお骨折り下さった成果も大きいと信じている。赴任前の頃は有名なガダルカナル島の苛烈極まる撤収作戦が大きい犠牲のもとに、遠い南の孤島で進んでいた。いまだに一般の国民の耳目には敗戦の兆が現われ始めている真相を知らない時代であった。本土と南の島に通じている大海には敵の潜水艦が数多く出没し、わが輸送船がしばしばやられている報道を洩れ聞いていた。そんな当時だから目的地に達する確率は五〇％である。よし人生は一度は死ぬものだ。畳の上か、海中の相違だと決死の勇をもって赴任にふみ切った次第である。同行の故金井常務、矢都木氏（会計担当）も決意は同じであったと思う。現営業部次長の松田君は昭和一八年秋、運よく単身赴任した。

故堤会長からの箱根神社の守り札をかたく胸に秘かに納め、軍港宇品からくしくも守り札と同名の箱根丸に乗船した。同船は旧式の欧米航路の貨客船で船足も十ノット前後で誠に心細いかぎり。油を流したような静かな南の海を、魚雷を避けるためジグザグコースで走っている位無気味なことはない。航海中は専らインドネシヤ語を覚えることに試験勉強のように熱中していたが、いつ海底の藻屑となってフカの餌食となるやもしれぬ不安のため頭にはさっぱりはいらなかった。今日当時を回顧してよく悪運強く目的地についたものだと思う。同船はその帰路シンガポール近くの島陰で魚雷を受け今も海底で静かに眠っているはずである。まえがきが大分長くなったが、快適だったバンドン生活に入る直前は、以上のような大げさにいえば、死と対決した二週間があった事を附記しておく。

バンドン市

当市は首都ジャカルタ市から急行で四時間位で達する海抜八百～九百米の四方高い山に囲まれた美しい高原の文化都市である。高台地のダゴー地域は高級オランダ官吏の別荘や、退職者の高級住宅地にもなっていた位だからいかに住み心地がよいかが想像されるであろう。気候は一年中日本の六月か九月頃のような爽かさで、バラやコスモスの花が住宅のみどりの芝生の周囲に咲き乱れている風景は今も私の瞼から消えずに残っている。当市にはスカルノ大統領が卒業した工業大学、地質研究所、博物館、造兵廠、などが在る人口四十万位の都会である。周知のバンドン会議を再三開催した当時の有名なホテルホーマンは、街の中心に位置している。

バンドン工場

工場は郊外に位置し原地人にはカレットガスマスケルファブリックと呼んだ方が通じ易いほど、オランダの戦争準備のため、ゴム防毒面を盛んに作っていた創立五年の工場である（カレットは原地語の「ゴム」という語）。芝生につつまれ、工場内部もすべてタイル敷になっている欧米スタイルの美しい工場であった。工場のボイラールーム側には神田川位の大きさの清流が流れ、八ッ目鰻に似た魚が釣れた。周囲は水牛がのんびり野草を食っている静かな環境であった。赴任時はスリンハーという恐ろしく背の高いオランダ技師が、軍人の管理下で、不安そうに仕事をしていた。工場の設備規模は丁度当時の当社位、従業員数も一五〇人程度で各種ホース、型物等を製造していた。着任後一ケ月間でオランダ技師から技術的事項をすべて引き継いだ後、技師の家族等は抑留所（特種キャンプ）に収容された。これは戦争の冷厳な現実である。彼等が収容される前に、相当の餞別金を与えたり、彼等の不用の家庭用品を適正価格で買い取って温い握手を交しあった。しかし数年後、私どもが敗戦国民となり、立場が逆になって収容所から出てきて彼と再会した時、工場が大きく立派になったといって喜んで感激の握手をかわしてくれた。

「今日は人の身、明日は我が身」という諺の通りだ。着任当時オランダ技師を虐待していたら、完全に当方は戦犯者になっていた事は間違いない。

当時本土との海上輸送はほとんど遮断されたので、南方軍百万の自給自足のため、我が工場も作戦や軍需物資調達のための至上命令を受け多忙を極めた。「私は出来ません」という不可能の言葉は絶対にはけない情勢にあった。終戦時には従業員数も一五〇〇人を超過する工場になっていた。その期間中に製造した主要製品は①自動車用部品、②飛行機用部品、③各種ホース、④ゴムライニング、⑤動力用V型ベルト各種、⑥電気用絶縁粘着テープ、⑦ゴム被覆ロール、⑧エボナイト製品、⑨防毒衣料（ゴム引布のミシン加工）、⑩ゴム製指脚浮舟、救命ボート、⑪爆雷用ゴム袋、⑫ゴム製給水用ゴム袋（背負型）、⑬ゴム製瀘過装置

右の中で⑨から⑬までの製品は当時の戦局の苛烈な様相を物語っている。大増産に邁進し、加工用ミシン機も百台を突破していた。余技に軟式野球ボールを作っていたので、兵隊さんに進呈し喜ばれたものだ。

工場の従業員

三、四人の混血人以外は、原住民のインドネシヤ人で、ほとんどは素足で通勤していた。オランダ三百年の植民地政策により就学率は非常に低い。当島は砂糖、コーヒー、タバコのお国柄。（タバコは少年時代から愛用している。）従業員の朝食はコーヒーを飲んで出勤するだけであるから、午前中の休み時間には垣根越しの道路側は露店の飲食街に早変りする。主食はパサパサした米飯、副食は殆んどはヤシ油で揚げた魚や野菜類をバナナの葉で包んで売っている。回教（イスラム）の掟で豚肉は絶対口にしない。山羊肉はサティアヤム（焼き肉）として賞味している。それらを右手で口に入れるが、左手は不浄の手として絶対に使用しない。（排便の折は水洗しながら左指を使用するからである。

殆んどの従業員はタバコを玉蜀黍（とうもろこし）の乾葉に細くつつんで喫煙しているほど愛煙家が多いが、工場内では絶対に禁煙を守らした。着任まもなく機械室の有能な職長がその禁を破ったので、惜しい人だったがばっさり馘首した。作業者には白い作業帽をかぶらせ、職長（マンドルと呼称）以下職階により赤線を三本までハチ巻きにして区別し、統制をとっていた。私の原地語による製造指導で、従順によくやってくれたものだと今でも感謝している。「アジアは一つである」という当時の軍の宣伝と、彼等と肌の色が同じであるという親近感をいだいておったと思う。事務所前の道路では時々、英国やオランダの大男の捕虜たちが、日本の小男の兵隊さんの銃剣に守られて歩いている情景は彼等の目に如何に写った事だろう。

バンドンの休日

昔から南方ボケという語があるが、四季の変化がないので、住みついてみると確かにぼけてくるようだ。特に高原の町では殆んど汗をかくようなこともないから、健康上にも、ノイローゼ防止のため、或は明日の活動の源泉のためにもテニス（硬球）で汗をたっぷり流し、チーズを肴にビールを快飲した。ラケットを手にしてコートに行く私どもの姿を見つけると、直ぐ七、八人の少年がうるさく集まってくる。彼等はネットの前後と後方の四隅に立ってくれるので、ボール拾いは彼等がやる。下手なテニスはボール拾いで疲れるものだ。私どもは単にボールを打っておればよいのだ。ゲーム終了後は、用意した紙巻タバコを五本づつやれば、トアンバニャックトレマカシー（旦那様大変有難うございます）といって大変喜んでくれたものだ。当時私共が愛煙していたタバコは現地人には入手できなかった。

工場の空地に防火壁用土を掘り出した大きな窪地があり、小川から清流を取り入れて、大きい防火貯水池（一〇〇〇坪位の広さ）になっていた。この池に島の淡水魚を放流してあったが、これは私個人専用の釣り掘池となって

いた。「今日何時頃、釣をするから」と守衛等に連絡しておくと、池辺に、釣具、ミミズ、椅子など用意万端準備してある。私は腰を椅子におろすだけで、釣糸を投げ浮きの動きを見て釣り上げるだけでよい。私の両手はタバコを手にする以外に一切手を汚さない釣師だった。昔の大名殿様の釣りもかくやと思われる。魚は私一人の夕食のフライだけでよいから、残りは気前よく手伝いの人々に与えた。彼等からトレマカシと頭を下げられ喜ばれたものだ。

赴任当時、碁は最下級の一八級（？）から終戦時には七、八級位に昇格していたようだ。碁の相手は近所に住んでいるガス工場長の根中氏である。彼には混血の背の高いやせた現地妻があった。彼女は御気嫌のよい時は、トミーさん（私のニックネーム）と私を呼んで温く迎えてくれたが、少しヒス気味のごきげんななめの時は、盤上の戦い最中の石を両手でかき乱されたものだ。「やめてくれ、早く帰ってくれ」というサインだが、私は大きく哄笑し、彼は私の面前で彼女にやさしくキッスして終局とした。日本の家庭ではちょっと考えられない事だが、このような事は再三再四であるから、私もすっかり馴らされていた。

彼女は終戦後先に帰国した彼氏を慕って、幼い子供をつれて日本にやって来た。十年前に彼等夫婦が博多に住んでいる頃、訪ねていったらトミーさんと飛びつかれ、私の顔にあついキッスをしてくれたが、悲しくも彼女は三人の子供を残して昨年他界した（根中氏は九州電力の研究所勤務）。

夜のバンドン

夜の町は終戦まで燈火管制は一度もなく、常に明るい電光を受けて街路樹の緑の色濃い町通りは夜がふけるとともに人の足が繁くなる。女あり、酒あり、豊富な食物あり。女は当島の中でもバンドン附近はスンダ美人の産地として知られ、肌の色も日本人並で、俗にいう京美人にたとえられている位である。原地の女、土着の中国人以

外に欧米人や中国人との混血の美しい女が多い。ハーフカスと私共が呼んでいた彼女等の身体の線など、到底日本の女たちとくらべるべくもなくすばらしい。

戦局はいつ祖国の土を踏めるか皆目見当がつかない。現地で任務中の日本人はすべて独身者である。条件や環境は用意されている。しかし選ばれて来ている商社の人々の多くは、各自の使命を自覚し、女や酒には節度を守って、明日の活動の源泉にしていたようだ。町の将校用、兵隊さん用の慰安所では原地の女、混血人、朝鮮、日本の女と多種多様であった。金のある商社の人々はほとんど利用しなかったと思う。夜の町には日本人専用のバー、キャバレー、安くて美味な中国飯店、酒店には多くの新鮮なよい家庭の若い娘が働いていたからである。腕にもよるが、「オンリー」として同居するには五〇～一〇〇円位だともれ聞いていたが、金やバターにとび込んでくる女には未練がなかった。現地生活で痛感したことは、男女はお互いに心の琴線に触れ合う愛情によりまず結ばれなければ、心の渇を慰やす事はできないものだという事であった。この事は当然、同人種でも適用できるが、異民族となると、言語や風習の相違による男女の人間関係は複雑のようだ。

日本式の青畳の上ですき焼やマグロのトロを肴にして、日本酒をかたむけられる料理店も進出していた。仲居さんは日本の女であるが、小間使いに原地の少女が五〇円位で買われて働いていた。島にはあまりにも人口が多過ぎるからだ。

原地の処女はイスラムの掟によるものか、神の前で挙式をしないと、なかなか男のものにならぬものだ。どこかの国の女と違って大変かたいということだ。しかし一度結婚すると、非常にルーズになるもののようだ。やはり一夫多妻のお国柄のせいか、男天国の島である。常夏のせいか性の目覚めも早く、幼い少女の胸も大きく鼓動していた。土地の女に年を聞いても殆んどはキラキラ（およそまたは約）一六か一八と答える。みな南方ボケしてい

るためと思う。

仕事にのみ精力を集中し過ぎたのか、音痴のせいか、島の有名な「サプタンガン」や「ブンガワンソロー」の歌曲もマスターできないで、悲しくも敗戦になり残念であった。

過去の名画「モロッコ」を地でいったような数々の青春の、温い、悲しい思い出を、遠く島に残してきたが、今日では心の底に静かにつつんでおいた方がよいと思う。

わたしの言葉

田　中　克　己

むかし、この雑誌で、読者から詩稿を募集するから、君たちが選者になれと、堀辰雄さんから、神保光太郎、津村信夫、わたしが云われたが、津村は死に、神保は音沙汰なく、杉山平一君に頼んだら、ことわられた。止むを得ず73歳(数え年74歳)のわたしが、編集選者になる。もとより好き嫌いの多い男だから、選に公正を欠くかもしれないが、新年号が創刊号で、しかたなく堀江忠道君の訳詩と、花井たづ子夫人の作品をのせた。これからは、創作の詩、ならびに文章をどしどし寄せてもらいたい。ただし、4回以上の会費（2,000円以上）を出してくれなければ、のせられない。当分、2段組にするが、これも財政上止むを得ないことを、了解してもらいたい。いづれ適当な選者がみつかると思う。春（正月号）、夏（5月号）、秋（9月号）、冬（12月号）の4回だけは決死の覚悟で出すつもりだから、安心して募集に応じてもらいたい。200部しか刷れない。

以上

（同人規定）

一、同人は田中が『四季』にふさわしい作品を選び、毎号のせることとする。

一、老大家*以外は同人費として毎月二五〇〇円（送料共）を納めること。

一、なるべく常用漢字、常用かなづかいを用いること。（短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする）

一、当雑誌を各方面に広く配布してもらいたい、売金を刊行元に送金（郵便小為替）で送ってもらいたい。（送料引）

一、同人に適当な人があれば紹介してほしい。

同　人　名　簿

順不同

*植村清二	176	練馬区桜台6−8−5
岩崎昭弥	502	岐阜市近島232
石山直一	559	大阪市住之江区住之江1−3−10
牛尾三千夫	694	島根県邑智郡桜江町市山474
小高根太郎	156	世田谷区桜1−63−6
高橋しげおみ	632	天理市三島町100
福地邦樹	578	東大阪市新庄241−17
江頭彦造	167	杉並区下井草2−16−12

中央線の古本屋

田中克己

中央線はわたしにはこわい
可愛ざかりの次男を焼いた火葬場が見え
親友立原道造の入院絶命した病院が見える
新宿まで一〇分でゆくが
地下鉄を利用して成城大学へ二三年間通い
名誉教授の称号を得たが
恩給は私学共済組合から月二〇万円（税込み）くらし
仕方がなくて沿線一番の古本屋
都丸書店支店にゆき
ソヴィエト百科辞典を一二万円で売った
も一部は一三万円でまえの勤先の図書館に入れた
そこには講師で国文の二葉亭四迷の研究をした男が
私の退任後赴任してむだにはならかった
都丸書店の本店は表通りにあり駅から一分
その裏の地下道に支店があり
洋書和漢書が置いてあり顧客がたえない
正月新刊の第五次「四季」（わたしの独断専行）も
この店にゆけば買える（一部四八ページ・五〇〇円）

五〇

川村欽吾	036	弘前市豊原2−3−35
小杉茂樹	421−05	静岡県相良町波津762−2
伊達温	565	吹田市尺谷24−5
*野田又夫	602	京都市左京区松ケ崎三反町5
坂口允夫	630	奈良市高畑大道町1232
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲前町707
石浜恒夫	558	大阪市住吉区墨江2−5−6
*松枝茂夫	167	杉並区本天沼2−37−21
山住正己	166	杉並区阿佐谷南1−38−2
*藤沢桓夫	558	大阪市住吉区上住吉2−12−4
秦海人	181	三鷹市下連雀4−5−13　小林方
*高田瑞穂	157	世田谷区成城2−4−20
田井中弘	520−03	大津市伊香立下在地町914
*矢野峰人	158	世田区深沢2−14−17

季刊 四季 創刊号

発行 四季社
東京都杉並区阿佐谷南1−40−8
電話 03(314)2783
田中克己方